〔駒沢女子短期大学　研究紀要　第十五号、P二十九―三十八　一九八一〕

宗門保育の一考察（一）

野崎信洋

一、はじめに

私は、このたび標題について考えて見ることにした。それは、私自身の教育活動についての今日までの反省と、将来現場に立って活動する保育者像は、いかにあるべきか、その精神面の育成を主眼として、強く逞しい人間性を培うにはどうすべきか、という考えを根本としている。特に宗門保育とは、どのような目標をもって行なったらよいか、の本質を探求しながら、仏教的な人間像を幼児の生活の上に立って、いかに具現すべきか、その教育内容をいろいろと、専門家のご教示を仰ぎながら、改めて考えて見ることにしたいと思う。

今日、保育教育という言葉が用いられているが、教育と保育の用語について、以前から学者間にも論議され、それぞれの立場の解釈の相違のあることは別として、その教育なり、保育なりの活動の内容、形態あるいは方法論は、学問的にせよ、実践的にせよ、とにかく、一つの歴史的な時代を経ながら、多くの保育者によって、更に新しく進歩発展し、それぞれの専門家や現場教師から、あるいは父兄から、互いに関心と期待とをもって、研究工夫が展開されて来ているのである。このこと自体は、歴史性の貴重な教育の問題として捉えねばならない。さて、私が、ひるがえって思うことは、以前から「人間形成」という言葉が用いられてきたが、それは、「人格の完成」とか、「人間の完成」という言葉と同じように使われ、その具現を冀って来たとも考えられる。そもそも終戦を境にして、いわゆる「人間の教育」のことについて、その思考創造の価値的内容も、教育的な方法論も、あるいは行政的な制度も著しく変革されて来たことは言うまでもない。すなわち、民主々義的な「人間教育」の生活活動として、これが行われ、続けられて来たものである。前述の「人格の完成」とは一体何であるか、否、人間が形成し尽されるということは、何であるだろうか。なるほど「人格の完成」と言う言葉は、意識や概念の中には思想としては仮りに充たされうるものとしても、しかし、全きを得ることはけだし容易なものではないであろう。「人格の完

成」はありえないという考えも肯定されるだろう。しかし、一つの可能性を信じて、自己を磨きつつ一歩一歩完成への方向を目差し、懸命の努力をすることにならねばならない。そうでなければ教育思想も現実も成り立たないであろう。人間自身、教育の必然性とその完成を目差してやまないものである。「大器は晩(な)る成し」という逆説的思考は、儒教的な教訓ではあるが、人間の完成はありえないものだ、といっても、それは一日も油断せず、自己研鑽にはげみ、人格の修養に努めることの必然を説くことは、儒教的な態度でもあろう。また今日「生涯教育」ということが擡頭して来たが、これは、「各人が生涯を通じて自発的に学習し、価値ある人生を送れるように」、「各人の生涯を通じて自己向上の努力を尊び、それを正常に評価する学習社会を目指す」「完全な人間をめざしての学習」であり、「完全な人間とは――身体的、知的、情緒的、倫理的統合が達成された人間の意味である」とされ、即ち、広義の意味では自己を充してゆくたゆまない学習ということになろうが、更に、個人の必要に応じて生涯にわたって、教育を保障しようとする考えをもとにして行われる教育である。更に、生涯教育のまとめとしては、「1、未来の文盲にならないため、2、教育権の生涯保障、3、専門教育と一般教育の統一」と示され、あるいは、「未来社会を創造的に考えられ、未来と現在を融合させる技術などとか、更に、生甲斐を重視する教育のよろこびとか、働くよろこび、知るよろこびを考える」等、を生涯教育の重要なねらいとして考えられ、すなわち「教育機能を人間の発達段階に応じて、一人ひとりの能力適正に応じ、個性に応じ情況に応じ、使いわけながら体系化しようとするのが、『生涯教育』の理念である」とも説いている。

ところで、今日、わが国の幼児教育は義務の法的措置はないが、将来に期待し、発展するものとして、意図的、計画的に保育内容の学問が考えられているので、生涯教育とは発想の性格は異るが、これと関連づけて幼少時よりの教育が望まれることも意義なしとしないだろう。そこで保育者の学問的内容が問われ、「思想なき実践」という誤解を受けないように、学問研究の向上に、その実をあげねばならないだろう。

そこで、幼児の人間としての可能性を信じつつ、成長発達を見まもりながら、保育者自身も豊かな人間性のなかに、調和的な内的発達を自ら培う心的態度を、養うように心がけるべきと考える。むろん、教育は、人間を人間たらしめる働きであり、人間の成長発展を助け、よりよい立派な人間に育て上げる行為であり、更に人間そのものの人格的価値観を発見させる行為でもあろう。したがって、保育者は、価値的体験を得ながら、生活の中に反省を求め、価値体系をしっかり自己の中にとり入れるように、その道を育ててゆきたいものである。日本のフレーベルといわれた倉橋惣三は、「教師という存在を捨てて、幼児と同じ床に立って、幼児とともに語り、幼児とともに磨いてゆけ」と、『幼稚園雑草』に語っている。教育者と被教育者とが一体となって生活するところに、教育的意義があるものとも考えられるのである。

さて、わが国へ伝来した幼児教育史の流れを考える時、独逸に起り、英国、米国、そして日本へと、その教育技術が伝って、早くも一〇〇年

の歴史は定着し、学問的な保育原理を始め、幼児の発達心理学、幼児の言語教育、自然の教育、小児医学、小児保健、あるいは実技的な図画工作等が科学化され、その学問が大いに確立され、理論と実際が著しく進展し、更に、研究が重ねられてその存続が大いに叫ばれていることについては、私たち保育者は、学問的環境にあることを歓喜し、自己自身の生命の存在に重みと自覚をもたなければならないだろう。そこで、学問的、歴史的価値を顧みながら、一教師として、過去、現在、将来を思惟し、内面的な自己像を凝視しながら、幼児の発展可能な面を把握し指導したいものである。幼児の存在は一個の個人であると同時に、社会的、歴史的存在でもあり、やがては社会を醇化しうる人格形成者として、発展創造するものである。保育者は、「与えられたなすべき保育教育を正確になすこと」が大事だが、保育者自身「教育者として働く場所はここだ」と顧みながら、どのようにすれば幼児に充たされた教育活動が行われるかを、振り返りながら現在像から将来像へ向って成長する幼児の生命を、たしかめながら、よりよい人格形成への、基礎づくりをしたいものと思う。私は、たびたび他の機会にも述べたように、幼児の言語行動も精神行動も、ともに、成長発達の現実を脳裡におきながら、教育愛をもって観察すべきものと考える。近代教育においては、子どもの生活を尊重し過ぎて、却って自分を失わしめようとする現象がある。個性尊重の基盤に立って、「集団の生活こそ教育活動が、容易であるという実際面もあり、或は他のものの影響を受けながら自分を立て直す」、そういう客観的な自分を考えるには、環境の影響を重視しなければならない。また教育過剰におちいらぬように、集団生活の実をあげてゆかねばならないだろうと考える次第である。

二、宗門保育者として

本学の保育科は、仏教精神を人間性の基盤としている。保育者育成のための基礎的人間学として必修せねばならない学問は、禅学であり、仏教学であり、更に一般教養の学問である。「禅は自然や宇宙とのかかわりあいにおいて、真実の自己を適確に捉え、その自己に生きることを目指して、人間の本心真心に最も忠実に生きるところの生き方である」というのが上田学長の宗乗観であり、「仏陀の人生観を通して、人間を考える。それは、心即身であり、即ち自己であり、具体的な人格は「身」として現われる」と仏教学の太田教授が人間観を示され、更に、「道元禅師における学道の要点を学び、かつ、人間として、現代人としての生き方を探求する」と、学道の態度を禅学の東隆真教授は教示している。私は、この諸教授の要約的言説が、本学の教育の基本であり、中心思想であると考えている。そこで、私はこれを敷衍し、更に宗門保育の考え方を多少展開して見たいと思うのである。もっとも、この外に演習的なものとして、月曜朝礼での大講堂の三尊仏礼拝、三帰礼文、学長の宗乗講話や坐禅堂における正身端坐の行持指導等は、まさしく宗門教育の基本であって、すなわち、宗門的保育者形成の行的実践学道である。このように、本学の特色を象徴して宗門的な人格形成を目指し、自己礼拝の真

実にまで内面化することは、極めて重要な修業と考えられるのであって、これこそ、幼児教育の宗門的思考の本義でなければならないと考えるのである。このように、仏教的精神面を培うことを目標として、学的なものと、行的なものとの一体観をもって、教育具現に深い意義を見ようとする指導努力を忘却してはならぬと考えるのである。

さて、私たちが、宗門といえば、当然、曹洞宗の宗門を意味し、私も仏飯を喫すること幾星霜の流れの中に、自己を置いて生命を持続して来た。その宗門の原理的なものを生活の上に具現し、展開して来たものは何であったかを、改めて考えて見なければならない。それは、確かに「学道の自己」の反省であり、自己自身の内的に起る宗教心である。あるいは、自己像を凝視すれば、未熟なる過去像であり、現在像でもあろう。そこで、私たち教師の生活には、その理念として宗門的習慣を理解することに努め、仏心を宗教心の中心にして、生命の尊重を冀うような自己活動を土台にして、回光返照することを忘れてはならないと思う。

さて、そもそも、仏教は釈尊の教説である。

私は、釈尊の誕生の教示が仏教の始りであると思う。すなわち、「天上天下唯我独尊」の宣言的なことばに深い意義があり、人間の生命の尊重を認識すべきことをしっかりと把握せよというこの人間道の本質こそ、「唯我独尊」ということである。この基本を人間尊重の真実なものとして、表現されたものであると解すべきであろう。ところで釈尊の教説には多くの道がある。すなわち四諦、八正道は、真理諦得のために、修行によっての得道は、やがては、世界を正しく導き、正しく生きてゆこうとする教説であった。私たち保育者は、この釈尊の教えや道元禅師の示された多くの語録を研究しながら、人間学の真髄の意義を充すことによって、一層保育者としての向上をはかってゆかねばならない。

なんといっても、保育者は、その対象が幼児であり、仏の心を知らしめることは困難であろう。しかし、これが保育活動の最も中心であることはいうまでもない。仏の心を理解させる手段としては、第一に言語表現であり、それは教師自身の愛情に充たされた宗教心から発せられるものであろう。フレーベルは、「教育は神の心を知らしめることである」と述べている。ところで、私はかつて、仏教学者境野黄洋博士が幼児、児童に対して、「成道会」について説明された場面に遭遇したことがある。すなわち、「お釈迦さまが、お悟りになるまでは、永い間山中で、たくさん勉強をされた。それまでは人間の苦しみや、さまざまな困ったこと、わからないことがいっぱいあった。ところが、じっと考えているといままで解からなかったことが、みんなよくわかったのです。ほんとにうれしかったので、心がさっぱりして、きれいな気持ちになって、すがすがしくなったの。だからお釈迦さまは、とても美しい心持ちになったのです。これを「お悟り」というのです。だからみんなでお祝いいたしましょう」と結ばれたので、境野博士の言葉で子どもたちはよく理解が出来たようであった。この仏教最大の行事の内容の具体的な表現での説明がなされなければ、かえって、幼児の心に混乱を与えることになる。すなわち、成道の意義—世界人類がしあわせとなり、その真理を悟

られて絶対動かすことのない一大確信をえられて仏陀となられたこと――を、仏教の出発点としてこれを伝えねばならない。成道の「道」は「菩提」であるとされ、悟りの完成といわれ、心を静め、精神を統一する正しい悟りの知慧を含んだ無執着の禅定ともいわれている。そこで、「悟り」の中核をなすものはなにか。それは行為の価値を育てるという仏教本来の考え方があるのである。そこで、先ず、仏陀の基本的な思想を教育の軸としながら、道元禅師の教説を研究し、保育者自身の指針とすべきである。『正法眼蔵・現成公案』に、「仏道を習うというは、自己を習うなり、自己を習うというは、自己を忘るるなり、自己を忘るるというは、万法に証せらるるなり」と示されている。人間はとかく客観的環境にとらわれ、徒らに、表面化された感覚的環境に精神は奪われてしまい、自己自身の内面観を忘却しがちなものである。私たち保育者自身もあるべき自己像に気がつかず、高処に自分を運び上げる精進を怠りがちとなる。己のあるべき位置を確認せず、人間的行為をどのように客観視するか、宗門保育の原点は、やはり教師としてそこに心をはたらかし、全機をもって、自ら行ずることであり、自他の認識に目覚め、他人の行為したものと、自己の為したものとの差別をし、「他は是れ我に非ず」とする自発活動を発揮することではあるまいか、と考えるのである。「行ずる処に道は現成する」とは、宗乗の教えられるところである。保育現場の教師は、自己開発を顧みようとする心的な反省を無視することはできないであろう。すなわち、日々の教育活動を行うところに、道元禅師の教えが展開することになる。宗乗学者衛藤即応博士は、「回光返照の退歩を学せよ。汝の脚下を照顧せよ」「本来の面目を自覚せしむる道元禅師の教は、強くわれらの心絃に徹し、個人的な欲望に動く自己に覚醒ぜさるをえない」と述べ、更に「道元禅師は、この理解以前の根本の行に立って、理解による一面的の仏教を排斥するのである。而してこの如何なる面をも包む根本的の仏教を禅師は常に仏道といい仏法というのであるが、何等の限定もない全体的の仏法は、一切経の根源である仏行が行として体現せらるる外はない。行は人格を離れては考えられないのであるから、人格を媒介とする「行の仏法」、それを道元禅師は正法の仏法と称する」と述べている。むろんこの博士の言説は、仏道修行するいわゆる専門家に対する至心な教育行の示訓であろうと思う。しかし、私たち保育者は、その真実を自己なりに会得して学習すべきであると思う。とにかく人間形成の土台を指導する保育者は、直接幼児の感覚に触れ、教師の人格性を通じて行われる教育作業は、学者の言語思考を真剣に学習し研究工夫をする必要があると考えるのである。

一挙手一投足の実活動は、鏡の如く幼児に反影するものであるから、教師の人格的指導感化の重要性を認識し、幼児の精神面に仏教保育が現成するよう工夫すべきであろう。それがただ単に行為するための行為ではないので、将来ある幼児の可能性を認めながら、真実を打ちこまなければならない。すなわち、宗門保育の一面の真実なる端坐正念の態度は、一朝にして身につくものではなく、いくたびも、反復学習するところに、形と心が培われ、将来への人間形成が内的に充実されてゆくものと考えられるのである。

さて、仏教は覚醒の宗教であるといわれる。木村泰賢博士の『仏教概論』は、「仏陀の最後に到達した宗教的基調は、要するに自己一心の反省であった。つまり、無限生命に対する憧れも、解脱の要求も、凡て吾が心に発した以上、その最後の解釈をも亦心に求めねばならぬという結論である」と述べ、私たちに、自己内省を示されたものと考えられる。仏教の帰着点は、結局自己をどう見るか、「自己」の心の動きをどのように把捉するか、教師の自己内観をどう理解したらよいか、そして、宗教心をどのように発展させるか、という大きな命題と取り組まなければならない。とかく現代社会人は、人間のもっている真実を失い、唯物的思想に包まれて、自己をうばわれ、悪を悪と知りながら悪道に沈潜してゆく。機械論的に今日的な人間世界を形成して、宗教的な豊かな情操面は失われてゆく。つまり、人間文化の精神生活は消え去り、動物化してゆくように見える。幼児の世界は、利害関係を微塵ももたない。純粋性に充たされている無垢な幼児像そのものである。先程も述べたごとく、仏陀の教説も、道元禅師の教説も、飽くまで、人間の道であり、人間そのものの認識を掘りさげてゆこうとすることを教示されたものである。宗教心というものは、苟くも、生命欲のある限り、理性的反省のある限り、なくてはならぬ道であり、その宗教心の発展は、とにかく生命とかその活動は、指導にあたる保育者の立場からは見逃がすことはできない。物の存在価値にしても、あるいは、生命発展の行為にしても、直接間接の指導は極めて容易ではない。幼児は、仏は生きているものと考える。動植物にも心があり、情もある。そのように霊夢の純粋な心情の、美しく宗教的なものと考えられる。その情感の発展を育てたいものと思う。小さいものにも命があり、価値を発見させる。このような見る目をひろげ、喜びをひろげるという慈悲に充ちた幼児の心情を、是非真直ぐに育ててゆきたいものである。仏教の唯心論が、この頃話題になっているが、私は今これを問題にして、宗門保育のかかわりを云々する考えは毛頭もっていない。ただ先般、読売新聞紙上で「仏教における物心一如観」の基調講演された仏教思想史の泰本融法大教授（八月二十八、九日、静岡県生産性研修会館での「仏教と科学―心とは何か」をテーマに開かれた）の、物にも生命があるという思考や、「科学者も人間であることを忘れないでほしい」という科学者の野田春彦東大教授の短文に共鳴したので、いささかここに挿入して見たに過ぎない。

そこで、文明文化の発展は、人間を不幸な破目に陥し入れようとする現象さえある。仏教で「三宝に帰依する」として、仏を敬い、きまりを守り、そして仲よくするといい、人間と人間、人間と社会の関係を忘れさせないように、これを持続発展さす人間世界を、希求して止まないことは万人共通であろう。そこで、仏の最高人格を敬う態度をもって、本心本性の暖い真心を生活の上に具現するように努力したい。

さて、先程の物心一如の生命観をもって、物にも素直に謝する心を養い、過去の過ちを許しあい、、そこに人間同士の仏心の通じあいを交流したいものと思う。

三、宗門的な保育環境

さて、そもそも教育的環境も仏教的環境も、ともに教師が設定するものであろう。しかし、別の考え方をすれば、幼児集団が環境をつくるという考え方もある。環境の準備設定はやはり教師自身の思考によるものと思う。特に、宗教情操涵養の場をいかにしつらえるべきか、と保育の前後左右に心を配り、安定感と調和をはかるべきである。仏教関係ならば、必らずホールに礼拝の対象仏が祀られている。これはその園における宗教教育のよりどころであり、合掌礼拝の道場と考え、献香献華、浄水を揃え、その配置間隔の十方の位置は、人間の心のおきどころを教えてあますところなく、至心に仏に誓いを唱え、そして信仰に近づこうとする行為であって、法悦を身につけさせ、価値観を培うものである。

仏の面相を敬い、清浄心をもって清く正しく生きようとする信念をもって、世界人類に貢献しようとして、合掌をもって、仏に誓う内面の努力をすることは、やはり、幼児自身の人間性を、更に美しく立派なものにしようとする態度を培うことになる。都会人は常に雑踏の環境に生活して、情緒なく、分裂的症状に行動を起し、とかく動物的と化している。だからこそ、幼児には宗教的雰囲気の中に、賛仏歌を歌い、正念の姿勢を培うことが、すなわち、宗教心の発達となり、それには保育者の指導精神が重要であり、将来に向って、知、定、慧に充たされる人間となるよう、一人ひとりの幼児を観察してゆくようにしたいものである。

小原国芳先生は、ご自身基督教者であるが、「幼少時には寺院生活をした。そのため仏さまを忘れることが出来ない。神さまに対しても同様だ。つまり人間の生活に神仏のおかげに謝する心を失わぬという気持ちから、必らず神さま、仏さまと二つ続けて言わないと心が落ちつかない」と、その著『宗教教育論』に述べている。（勿論、小原先生の神さまは神道の神さま）宗教教育は精神面の育成が主眼であることは既に述べたところであるが、「保育」という集団の生活は、期間が短いので、一貫性をもった宗教教育や宗門教育としても、理想的にはゆかないが、しかし、短期間の集団生活に施される宗教教育にしても仏を拝み、生命を尊重し、物に対して感謝する、等は、人間の基本として躾けられねばならないもので、精神面の学習は、今日の時代なればこそ、一層必然となってくるものと考えられるのである。前にも述べたところであるが、今日一般社会人は唯物的になって経済面の強調を叫びながら、精神を失いつつあるので、恩に謝する人間的な行為は失われつつある。私は、新村出先生の『広辞苑』の最後の編集のことばに感動を覚えた。日頃抱懐する四恩感謝の念をも新たにし、「思うてここに至れば、四恩の広大にして無辺際なる、早春の陽光とともに老身を包むの感を覚える」とあり、それは、『広辞苑』完成にいたる諸学者の方々の協力に対しての「四恩」の文字である。すなわち、衆生がこの世で受ける四種の恩（心地観経によると父母、国王、衆生、三宝）である。新村博士はこの大偉業たる『広辞苑』の完成は、文字通り四恩を受けてでき上ったというのである。私たち保育者は、そうした学者の胸にも、いろいろなおかげを蒙っている

という自覚があることを、単なる常識として捨て去ることは出来ない。凡ての保育活動の中に四恩に報じる道をよくよく指導したいものと考える。指導者自身が真実の心に立ちかえらねば、人の心を導くことはできないと思う。要するに、私たち保育者は、宗祖の心を生活課程の中に、いろいろな教育作業を通じて、自然に宗教心が芽生えるような工夫がなされねばならないだろう。仏を拝む心を幼児に向けて、互いに拝みあう姿は、互いに信愛の情をもった共感の世界となるだろう。人間は、自分にうち勝てない一面の弱さをもっている。強く逞ましい不動明王の如き人間性を培いたいものである。徒らに短絡的な人間は人を害し思いやる慈悲心を失い、衝動的に動物化する心理状態を戒めねばならないと思う。結局、それは自他の観念のない恐ろしい精神行動といわねばならない。保育者は幼児の頭上を撫でてやる。目をよく診て一人ひとりの心を洞察する。自己も仏、幼児も仏、仏と衆生の通じあいを、胸に抱きながら活動することの楽しさと、尊さを考えてゆきたいものである。「教育は接触なり」といわれることの内容を、現場で体験することは歓喜であり、限りない感謝ではなかろうか。私は、昔、駒沢幼稚園々児たちと戯れて遊んだ。相撲もとった。幼児は流汗の状態にて嬉々として眼は輝いた。面白かったと遊戯の体験を物語る。直接的な人間関係を結合しながら人間教育を深める。宗教教育は、暖い人間関係を通して、宗教的環境に幼児を遊ばせる。日頃の一体観を通して人間育成に努力すべきである、と考える。

すでに故人となった元本学講師の教育舞踊家・賀来琢磨先生は、舞踊の振り付の基礎的なヒントは仏像の面相である、と言われた。手や体の動きから学習するということである。たとえば、「合掌に始まって合掌に終る」という仏教精神の基調である合掌の姿、仏の面相、両手の千種万態の観音菩薩の像、破顔微笑の笑みをふくよかに湛えた表情、両肩の豊かさ、眼、胸、腰、脚、法衣の襞等、仏像独特な内面的な仏性の品位が象徴化されたところの姿形が、賀来先生にとっては床しい舞踊の資料となり、常に仏と対峙されたということである。私は今、法隆寺、薬師寺、秋篠寺等の本尊仏や三十三間堂の仏菩薩像、寺々の仁王の力強い表現の動きこそは、強弱、高低、緩急、大小、前後左右等十方に普く発展する高大な慈悲に充ちたもので、まことに変化にとんだ限りないものであると想像する。この一事を想像するとともに、各園に安置される仏像こそ幼児にとっては、またとない直線的な輝きであり、素晴らしい宗教情操の雰囲気をかもし出す真髄として、参考にすべきであると考える。

さて、先程も述べたように、宗教教育の重要性の一つは、合掌礼拝である。これは深い解釈も行われているが、我見、我欲、我情のない素直な、暖い心情を培うもので、単なる習慣ではない。「印度以来の礼法にして、仏教者が仏菩薩を礼拝し、恭敬する式作法なり。一心不乱を表示する相と為す。あるいは、十指の雙掌を合せ、腕を胸襟に近づけず、臂を腋下に少しく離れしめて指頭を鼻端に対するなり。頭低ければ指頭低し、頭直なれば指頭も直し。手指参差することを得ざれ、手をもって口辺に托すべからず。若し指合して掌合せざれば心慢じて情散ずるにより、必らず指掌相著けて虚ならしむべからず」とは『禅学辞典』の示す

ところであるが、仏を拝む精神は人間としての報恩感謝の心情を表現する形ともなるので、単なる空虚な儀礼とならぬように、至心に行じたいものである。合掌礼拝することによって、慈悲、同情そして努力する力も生ずることとなり、合掌聞法によって、仏の行蹟と覚者としての仏にあやかろうとする美しい願力が、心底に漲ることを信じてゆきたいと思う。それは、すなわち、使命感的な自己の充実感を掘り下げてゆくことである。更に、仏のやさしさ、情深い人間愛、はてしない慈悲心、南無と唱えて、有難く私心のない心をひき立てる清浄心の培い、仏の知慧、人間形成上必要とされる感情の陶冶等、人間社会の生活上になくてはならない要旨を身につけて、平和平等の世界をうち建てんと冀い、宗教的生命の本義を理解しつつ、教育活動に自己を打ちこみたいものである。

四、結び

現代人はあまりにも唯物的である。精神面の学習は暫らく措いて、思考が浅く、あまりに短絡的のように考えられる。換言すれば非常に自分中心の生活で、自他の観念に乏しく、快楽的方向に走り、軽重浮薄の傾向が生活に優先しているのではあるまいか。文明、文化の極端な進展は次第に人間生活を破壊に追いやることとなるのではないか。時間も存在も無視して、歴史も体制も否定しようとする。

米国の或る言語学者の、「存在を発見するのは創造であり、存在を無視するのは破壊である」という言葉には意味があると思う。

さて、どこに、どうして空虚なものがあって、人間を充たしてくれないのか。私は、一つの問題として考えたいのは、宗教心の不足であり、教育活動の掘り下げ方の単純さであると思うのである。更に、物と心との不調和というか、物と心とが分離してしまっているとも考えられる。ここに、良覚の宗乗観を借りて、結びとしたい。「自然というものは、何か二つのものが、一つになって動いているようだ、天地陰陽、男女、表裏、善悪、物と心こうした互いに一見相反する二律のものが、一つに動いているようである。賢愚二つのものが、一つになって動いているように思える。心と物とが一つになっていたともいいうるのである」。「裏を見せ表を見せて散る紅葉」。人間は狭い心で世の中の一面だけしか見れないので、物の両面を見なければ正しい判断は出来ないのに、私たちはとかく物にとらわれ、宗教を忘れて、一方的な人生の歩き方をしていることを自覚したいものである。保育者は、幼児を中心に教育するところを、自己啓発を慮り、宗教を土台とした人間教育に精進し、幼児一人ひとりの眼をじっと見ることに努め、更に、自己観に心したいと考えたいのである。本学保育科の精神としては、道元禅師の教育観としての脚下照顧の心構えをもって、保育活動に専心したいと思うのである。終りに見理文周教授、池田弘教授からのご指導に拝謝して、この稿を閉じる。

参考文献

1 道元禅師研究　道元禅師鑽仰会編
2 仏教概論　木村泰賢　甲子社書房
3 禅における人間形成　宮坂哲文　霞ケ関書房

4 保育指導要領　曹洞宗宗務庁社会部編
5 宗教々育論　小原国芳　玉川大学出版部
6 教育と人間の省察　岡田渥美　玉川大学出版部
7 仏教々育入門　斎藤昭俊　図書刊行会
8 仏教々育講座　日本仏教保育協会
9 生涯教育と社会教育　宮坂広作教育開発研究所